目をこらして

（8）

母が脳内出血で倒れ、言葉を失った。そのリハビリが
きあいながら、言葉はどこから来るのだろう。という思い
にかかった。

「頭の中に文字が　あるんだけれど、それが言えない」
という。頭の中の引き出しを手でかき回して探しているよ
うな顔をしている。しばらく待つ。もっと待つ。うん、
またにしよう」と母が言う。探し物はなかなか簡単には見
つからない。

四人部屋の住人は、顔や口、頭に怪我を負った人々。
「つらいね」と言いつつも笑いの絶えない病室で、母も少
しづつ笑顔を取り戻していった。

名前は？　どこドイツですか？　お年は？　という質
問が、回診の度に繰り返される。絆り出そうような答や、と
ちんかんな答が飛び出す。

看護婦さんが去った後、前のベッドのおばさんがつぶや
き「普通に、何ということもない話をするといいんだよ。」
母も笑いながら「緊張すると言えなくなっちゃう」と相づちを打つ。

絵と文　宮里瀧美（日黒区ふどう幼稚園）
耳をすませて

母の隣のベッドには、頭の手術をしたおばあちゃんがいった。ぼんやりとして、ほとんど話もしなかった。

そのおばあちゃんのところに、幼なじみの男性がお見舞いに来た。とたんに、おばあちゃんは「あら、だ、さま、わるい」と大きな声で言った。そして、ずいぶん長い時間うれしそうに話をしていった。田舎で一人暮らしをしていて倒れたというおばあちゃんだったが、気丈に一人暮らしをしてている様子が見えるような気がした。

緊張すると話せなくなる母、知らない人に聞かれていると一言も話せないおばあちゃん、でも、場面が変われば全く違う姿になる。言葉はどこから来るのだろう？

リハビリにつきあって、食事の手伝いをして、それでも心配で去りがたい気持ちの私に、母が、また何か言うとすっ飛ぶ。待つ、ゆっくり待つ。「あ、という顔になる。

母親の言葉が、母という体と心を通り抜けて、外界に出てく

るのを、私はゆっくりと待っている。

はし、はし、えっと

はたして、これだろう！

孫の名を紙にかきつないた。

カルタ遊びのように、遊んできた。